

「ツバメ観察プロジェクト」レポート

2022年1月

文責：気仙沼市立面瀬小学校6年担任 昆野 玄

面瀬小学校では、4年生と6年生がツバメの観察を行いました。

4年生は、理科の単元「季節と生き物のくらし」の学習で春から夏にかけてツバメの営巣や子育ての様子について観察を行いました。

6年生は総合的な学習の時間に営巣や子育ての様子を観察し、環境保全の観点からツバメが戻ってくるような環境について話し合いを行いました。

今回は、6年生の取組を中心にお伝えします。面瀬では、4月に入るとすぐにツバメを見付けることができます。学校には、古い巣も合わせると、全部で50ほどの巣が見られます。学習のスタートとして、どんな場所に巣を作っているかを観察させました。この時点で巣は、2階や3階の軒下よりは、1階部分の軒下や昇降口付近に多くあることに気付くことができました。さらに観察を継続すると、ツバメは必ずしも毎年新しく巣を作るわけではないことに気付きました。そのことから、ツバメに対して「リフォームが上手である。」「頭がいい。」「省エネだ。」などの思いをもつ子供たちが出てきました。

巣が完成するといよいよ卵を産み、本格的な子育てが始まりました。1階部分に巣を作るので、毎日のように巣を観察することができました。しかしながら、雛が生まれたタイミングで何度もカラスに襲われ、今年度は巣立ちを観察させることができませんでした。このことから、カラス対策について調べたり、カラスが雛を襲うようになっている背景について考えたりしました。また、学校に古巣が50ほどあるにも関わらず、戻って来て子育てをするツバメは4ペアほどだったので、ツバメが戻ってくるような環境について考え、学級全体で話し合う機会を設けました。観察記録から、ツバメの子育てに必要な条件は、「えさとなる小さな虫がたくさんいること」「巣に必要な枯れ草や泥が手に入ること」「ねぐらになるようなヨシ原があること」が挙げられました。その他にも「人が優しく見守ってあげること」や「カラスが増えないようにごみ捨てのルールを守ること」などの条件も挙げられました。

今年度は、ツバメの巣立ちを観察させることができなかったのですが、来年度は、カラス対策等も視野に入れながら戻ってきたツバメが安心して子育てできるような環境を整えたいと考えます。



日本野鳥の会の講師から生態について学ぶ様子



ツバメの視点から面瀬の環境を話し合う様子